

ようこそおいでませ、此処は驚異の部屋。貴方は記念すべき××××人目のお客様です。

なんと、ご存じないとは心外！

ご覧なさいな、此処の名前の由来となった展示品の数々を。珊瑚や石英を加工した装身具、実在・架空取り交ぜた動植物の標本やミイラに巨大な巻貝、オウムガイを削った杯にダチヨウの卵、貴重な錬金術の文献に異国の武器、機械仕掛けの形見函、はてはキリストの襁褓と噂される聖遺物に至るまで、此処に展示されているのは人類の叡智の結晶。

此処は次元の間に存在する場所。

時折お客様が迷い込みます。

偶然か必然か、驚異の部屋に至った彼等彼女等をもてなすのが僕の役目。

自己紹介がまだでしたね。学芸員とでもお呼びください。

……ん？ これまた毛色の変わったお客様ですね。

いえいえ皮肉なんてとんでもございません。

率直に申し上げ、貴方はとても美しい。

まさかご自身の容姿に無頓着で？

だとしたら罪作りですねえ、一体どれだけ女性や男性を泣かせてきたのやら。

さあ、水晶玉を覗いてください。

最高級の天鷲絨さながら艶めく黒髪、コーヒーに数滴ミルクを落としたような褐色肌、長い睫毛に物憂く沈む御影の瞳。

秀でた鼻梁に孤高の鬚りを纏わせて、一匹狼を彷彿とさせる野性味帯びた風貌に、心惹かれるご婦人がたはさぞ多いでしょうよ。しなやかに引き締まった長身瘦躯も注目を集めるはずだ。

まだお名前を伺っていませんでしたね。

なんとお呼びすれば？

……そうですか、好きにしろと。でしたらそうさせていただけます。ロマというのはいかがでしょう？

なんですその仏頂面。好きに呼べと言ったのは貴方でしょうか？

貴方はロマ。

大虐殺を生き残った流浪の民。

睨まないでください。この姿はお気に召しませんか？ か
しこまりました、指を弾いて……

アインス・ツヴァイ・ドライ！

魔術？ 手品？ ふふ、どつちでしょうねえ。ご想像にお
まかせしますよ。

今の僕は貴方の同胞、ツイゴイネルの美少年です。

黒い巻き毛と浅黒い肌、磨き抜かれた御影の瞳が証拠。こ
の姿は変幻自在、お客様がご所望ならいかようにも化けら
れます。老若男女問わずね。

さあさ遠慮はいりません、どうぞお近くでご覧ください。

驚異の部屋に展示されているのは僕が世界を股にかけ蒐集
した自慢のお宝、古今東西の名品珍品の数々。

胡散臭げな顔ですねえ、僕の口上が信用できませんか？

たとえばほら、貴方の右手に飾られているのは十五世紀の
ドミニコ会士、ハインリヒ・クラマーが著した『魔女に
与える鉄槌』の原本。ハインリヒ・クラマーは教皇イン
ノケンティウス八世の命を受けた異端審問官であり、本書
において異端や邪悪の根源たる魔女を激しく糾弾し、その

発見の手順や裁判の段取りを詳細に記述しました。後世で
はヨーハン・ニーダーの『蟻塚』、ジャン・ボダンの『悪魔憑き』
と並び、魔女狩りの三大奇書と呼ばれています。世が世な
ら禁書で焚書でしょうに。

……知ってる？

同時代の人でしたっけ、うっかり失念してました。

なるほどねえ、ハインリヒ・クラマーはペテン師だと。

ヨーハン・ニーダーやジャン・ボダンも同類だと、貴方は
そうおっしゃりたいのですね。

僕も同感です。曰く産婆は魔女、曰く薬師は魔女、曰く寡
婦は魔女、曰く曰く曰く……彼等の裁きにかかればおよそ

全ての女性が断罪されかねない。

あらら、また気に障っちゃいました？ すいませんねえ、
僕ってば人の心の機微とやらの疎くって。

未だ蒙が啓かれざる暗黒の中世。

白を黒に裏返すのが異端審問官の仕事であり、それにはし
ばしば拷問が用いられました。

おottoといけません手を触れちゃあ！ 驚異の部屋の展示
品は僕の財産、見物は無料ですが壊したら弁償していただ

きますのであしからず！

全く、ヒヤヒヤさせないでください。貴重な展示品だと紹介したそばから破り捨てようとする人がありますか、しかも書見台まで蹴倒して！

どうやら貴方にとって、ハインリヒ・クラマーは憎んでも憎み足りない怨敵のようだ。

さあ、お掛けください。立ちっぱなしは疲れるでしょ、座って話しましょうよ。

何が目的だ？

皆さん口を揃えてそれを訊かれます。

僕の求めは身の上話、お客様の数奇な半生。

言いたくない？

違いますね。言えないんですよね。

はは、その顔が見たかつたんですよ！ やっぱり貴方もそうなんです、都合よく自分の罪を忘れてらっしゃる！ここに来る人はみんなそうです、前の人も前の前の人も前

の前の前の人も。

人の身に耐えざる罪を背負い、あやまちの記憶を封じた者たち。

ねえロマさん、貴方は一体どんな罪を犯したんですか？

水晶玉を覗いてください。

濃紫のエリカが咲き乱れる荒野のただ中、真っ直ぐ敷かれた街道に幌馬車が連なっています。

乗っているのはツイゴイネルの一団。御者台の男が馬を鞭打ち駆りたて、女子供が伸びやかに歌います。寄せては返す風にエリカの海がさざめき、澄んだ蒼穹に歌声が吸い込まれていきます。

粗末な幌を張った荷台から苦しげな呻きが漏れてきました。おやおや、お産の真つ最中らしい。大股開いて息む女性の手を握り締め、老いた産婆が励ましています。

「もうすこしだ、頑張るんだよ」

ほどなくして甲高い産声が響き渡りました。続いて大量の羊水と胎盤が排泄され、産婆の細腕が赤子を受け止めます。

「元気な男の子だよ」

「ああ……」

まだ少女といえる年齢の母親は我が子を抱き締め、額に接吻し、喜びと絶望が入り混じった涙を流しました。

「本当に育てるのかい？」

産婆が疑問を呈すのも無理ありません、その赤子は白人とツイゴイネルの混血だったので。

自分と比べごく僅かに肌の色が薄い赤子を抱き、彼女はきっぱり言い切りました。

「この子に罪はないもの」

貴方の誕生はけつして祝福されたものではありませんでした。はじまりから呪われていたともいえる。

貴方は私生児だった。

半分はツイゴイネル、半分は白人。いわば雑種として生を享け、本来帰属する仲間さえも疎外された幼少期は過酷です。味方はお母上と産婆だけ。

目を瞑り思い出してください。

ツイゴイネルの多くは生きる術として芸を身に付けていました。ある者は占いをし、ある者は楽器を奏で、歌い踊って日銭を稼ぎます。傭兵として出稼ぎに行くものもいました。

ツイゴイネルが歴史の記録に登場するのは西暦1100年。

十五世紀には欧州全域に散らばり、巡業で身を立てるようになりませんが、貴方が産声を上げた頃には教皇庁の取り締まりが厳しくなり、どんどん苦しい立場に追い込まれていました。

人々はツイゴイネルを泥棒扱いし、強姦魔や人さらいの濡れ衣を着せ、地方や国によつては追放令や死刑に処します。囚人としてガレー船の漕ぎ手を強制される事さえありました。

貴方のお母上は美貌と踊りの才に恵まれた、キャラバンの花形でした。

自慢のお母上だったのでしょね。

十六で子を身ごもり、馬車の上で産み落とし、立派に育て上げたのですから。

貴方は物心付いた頃からお母上の踊りを間近に見てきました。

行く先々の町や村の祭りにて、楽隊の演奏に合わせ舞い踊る艶姿は、幼心にはつきり焼き付いています。

数少ない幸福な記憶。

幌馬車を駆る旅暮らしは決して楽ではありません。幼子だらうと容赦なく働かされます。

貴方も幼い頃から馬を世話し、飼い葉桶運びを日課としました。えつちらおつちら危なっかしい足取りで歩いてると、行く手に影が立ち塞がりました。

「わっ！」

飼い葉桶がひっくり返り、泥の飛沫が跳ねました。

だしぬけに突き飛ばされ転倒した貴方を取り囲み、いじめつ子が囁し立っています。

「やあい間抜け！」

「のろくさ歩いてるからだよ」

「厄介者は早く出てけ、目障りなんだよ」

いじめつ子たちは皆年上です。ちびでやせつぼちの貴方は唇を噛んでただただ耐えるしかありません。彼等はますます調子に乗り、ぬかるみに倒れ込んだ貴方に跨り、力づくで服を脱がせにかかりました。

「やだ、やめて」

当然抗いました。しかし貴方は無力でした。あつというまに丸裸にひん剥かれ、羞恥と混乱にべそをかきます。ですがまだ終わりません。いじめつ子たちは手掴みした泥を貴方の肌塗りに塗りたくり、口にまで詰め込んできます。

「喜べ、おそろいにしてやる」

抗おうと無駄でした。ともに馬車で回る子たちは貴方の肌の色を囁し、巡業先の町の子は石を投げます。

大人たちとて同様です。

貴方は嫌われもののツイゴイネルの中にあっても異端だった。

いじめつ子たちは貴方が嫌がれば嫌がるほど面白がり、しまいには馬糞を掴み、全身に擦り付けてきました。

「食えよ」

しまいには馬糞のかたまりを口に詰め込まれ、苦味と屈辱でめまいがしました。

「ううつ、ぐすつ」

どうしてこんな目に。

何も悪い事してないのに。

体も心も打ちのめされ、ぬかるみに突つ伏し泣きじやくり、どれ位経った頃でしょうか。いじめつ子たちは貴方をいじめるのに飽き、とつくに走り去っていました。

馬車の影に大人が集まり、こそこそ話しているのが聞こえてきました。

「ゾラはなんだっててなし子を産んだんだ、うちのキャラバン一の別嬪だったのにもつたいねえ」

「白人の種だろ、忌々しい。肌の色が俺たちと違うじゃね

えか」

「誰に孕まされた？」

「鍛冶屋のドラ息子が夜這いをかけたつてもつばらの噂だよ」

「収穫祭の日か。どうりで」

「アルスの町の粉牽きも怪しいぜ、村外れの水車小屋の。随分お熱だったみてえじゃねえか、絶対ものにしてやるつて飲み仲間に宣言して」

「俺はルーベン領主の三男坊に賭けるぜ。キャラバンが去つてすぐ修道院に放り込まれたつて話じゃねえか、おいたがばれたんだよ、きつと」

幌に映る影絵のおぞましさに耳を塞いで逃げ帰ると、ヴァイオリンの弓に松脂を塗り、お母上が待っていました。

「どうしたの、ベそかいて」

「母さん」

貴方はお母上の膝に縋り泣きじやくりました。聡明なお母上はすぐに何があつたか察し、真剣な表情で諭しました。

「悔しかつたら芸を磨きなさい。アンタを馬鹿にした連中

全員見返してやるの」

「できない」

「できるわよ。私の子でしょ」

お母上は優しく厳しい人だった。

一粒種の息子に愛情を注ぐ傍ら、歌を教え踊りを教え、ヴァイオリンの弾き方を教えました。

ゾラとはツイゴイネルの言葉で夜明けをさします。その名が示す通り、お母上の存在は貴方にとって唯一の光でした。察するにお母上は、貴方の生が過酷なものになる事を予想してらしたのでしょうかね。

折にふれ貴方を抱き上げ、手ずからヴァイオリンの弾き方を教えながら説きました。

「これだけは覚えていてね。貴方は私の自慢の息子。誇りを持って生きなさい」

そんなお母上も、貴方のお父上の素姓に因るだけでは頑として口を割りません。

ゾラさんは実に情熱家でした。貴方はお母上の気性の激しさを受け継いだのでしょうかね。

息子を侮辱する者あれば気炎を上げ、誰だろうと突つかかっています。

「この子は私が産みたくて産んだの、文句あるヤツは前にでなさい！」

ヴァイオリンの弓で男たちを鞭打ち、行ったり来たり追いつく姿は非常に滑稽で、皆が笑い転げました。

ええそうです、そうですとも。

貴方は確かに異端児でしたが、ツイゴイネルの暮らし自体は嫌っていませんでした。

たとえ村外れにしか野営を許されず、町や村の悪ガキどもに石もて追われ、大人たちに疎んじられようとも、車窓から覗く黄金に実った麦畑や収穫祭の賑わいが心を癒してくれました。

馬車の藁床で母と寄り添い眠る日々も、回る車輪が地面を踏む震動も、馬の嘶きや仲間の歌声も、定住する故郷を持たないツイゴイネルたればこそ郷愁をかきたてる。

年に数度の祝祭の日、ツイゴイネルたちは村の広場に招か

れ歌や踊りを披露します。

貴方もお母上と手を繋ぎ、村人たちと交わって軽快なステツプを踏みました。

老いも若きも男も女も輪になり、方々で黄金の麦酒が酌み交わされ、愉快な嬌声が弾けます。

ゾラさんは快活な笑顔で足を上げ下げ、貴方を褒めました。

「そうよその調子、飲み込みが早いわね」

辛い事だけではなかった。

楽しい思い出もあった。

だからこそ……。

お母上が死んだのは十三の時。

貴方は天涯孤独になりました。もはやキャラバンに居場所はありません。

そこで産婆に教えられたキャラバンの軌跡を、遡ってみることにしたのです。

ゾラさんの波乱万丈な人生を辿ろうとしたのでしょうか？ もしくは……野暮な詮索はやめておきましょうか。いずれわかることです。

ツイゴイネルの孤児に宿を貸してくれる物好きはおらず、

大抵は野宿でした。

母の形見のヴァイオリンを弾いて日銭を稼ぎ、それでも足りない時は盗みや物乞いをし、どうにかこうにか食い繋いでいたものの、限界は刻々と近付いていました。

その日、貴方は逃げていました。

全身生傷と擦り傷だらけな上、空腹で力が出ません。

空からは冷たい雨が降り注ぎ、残り少ない体力を奪っていきます。持ち物は母の形見のヴァイオリンだけ、それさえ弦が切れて使い物になりません。

不協和音しか奏でないヴァイオリンなど無用の長物。

ですか貴方はひと抱いて離さず、鬱蒼とした森へ続く道をひた走りました。

「追えー！」

「逃がすな！」

「あっちへ行つたぞー！」

よろめく足を血が伝います。すぐそこまで追手が迫つていきます。

万事休すと思われたその時、森の中に石垣を巡らせた、素朴な小屋が見えてきました。

考えるより先に裏手に回り、石垣を乗り越え、敷地に侵入しました。

ふと足元を見れば、地下室の木戸が少しだけ開いています。貯蔵庫でしょうか。

しめたと階段を駆け下り、まんまと忍び込みました。襪履切れと化したシャツの下で心臓が跳ね回ります。悪寒と火照りに同時に襲われ、体の震えが止まりません。

ヴァイオリンを抱いて蹲る頭上で扉を開け閉めする音が立ち、怒号が駆け抜けていきました。

どうにか無事やり過ごしたのも束の間、立ち上がりしな膝が泳ぎ、また蹲ってしまいました。

まずい事になった。すぐ出ていく予定だったのに……これでは家主にばれるのも時間の問題。

固い靴音が石段を下りてきました。

誰か来る。

慌てて奥へ退き、闇に慣れた目が戸惑います。

地下室というより工房でした。

部屋中に珍しい薬草や香草が干され、机には分厚い本と羽ペン、羊皮紙やインク壺がのつています。調合用の窯と鍋もありました。

「誰？」

「……」

穏やかなノックに次いで、柔らかな声が誰何しました。貴方は口を覆い、だんまりを決め込みます。

「開けるよ」